

「和歌山県視察会 2026」報告・視察レポート

～紀州材のバリューチェーンを知り、地域産材の可能性を考える～



2026年9月17日・18日の2日間、一般社団法人日本ウッドデザイン協会（JWDA）は、紀州材流通促進協議会の協力のもと、「和歌山県視察会 2026」を開催しました。

今回の視察では、森林組合・木材共販所、家具工房、製材所、公共建築、梅の加工施設、企業店舗、廃校を活用した地域拠点など、紀州材に関わるさまざまな現場を訪ねました。山で育った木が原木となり、製材・加工を経て家具や建築へと姿を変え、さらに都市部の企業や生活者との接点をつくっていくまで。その「川上から川下まで」の流れを、現場で確かめる2日間でした。

そこで見えてきたのは、地域の課題や、愛情をもって森・木に向き合ってきた人の思いが、建築や家具、空間、事業デザインと結びつくことによって社会提案性が備わり、新しい木の使い方や、暮らしの中で木に触れる楽しい場面が生まれている姿でした。また、森林所有者の後継や山への資金還元といった課題を抱えながらも、地域の企業・団体がしなやかにつながり、県内、さらに県外へと紀州材ならではの価値を高めていることも分かりました。

南紀白浜空港で行われたトークセッションでは、紀州材が建築になるまでの物語をたどりました。木を育てる人、伐り出す人、製材する人、設計する人、施工する人。それぞれの仕事をつなぎ、その背景にある地域や人の物語まで伝えることが、県外で地域材を選ぶ理由にもなり得る。今回の視察は、紀州材そのものだけでなく、「人と人、山と街をどうつなぐか」を考えるとともに、地域産材の活用をもっと広げる可能性とそのヒントを得る機会となりました。

（各視察先の詳細は、下記「視察行程」を参照）

視察行程

■1日目（9月17日）

訪問先	気づきと学び
紀州高田果園 （南高梅加工場）	梅の産地で、なぜ木を使うのか 梅の産地で「なぜ地域の木を使うのか」を考える。梅の酸性ガスによる鉄製設備の腐食や衛生管理上の課題を背景に、地場の農・林連携から構造材を紀州材へ転換。2024年ウッドデザイン賞（ソーシャルデザイン部門）受賞。
秋津野ガルテン （木造の旧校舎）	使われなくなった学校が、地域の拠点になる 使われなくなった学校を、地域住民の出資によって再生。木造校舎を活かし、都市と農村、人と人をつなぐ地域拠点へ。
龍神村森林組合・龍神 木材共販所 （木材流通）	山から原木が出ていくまでを知る 森林整備、伐採・搬出、競り後の共販所の様子などを見学。森林所有者とのコミュニティの拠点として、植栽から再造林までの手入れを担い、高齢化や世代交代で見えにくくなる森林の状態を、レーザー測量と現場の経験知で把握。伐り出した原木は共販所で樹種・径級・長さ・品質ごとに仕分け、木材産業事業者へとつなぐ。造林から製材加工までを担う総合型だからこそ、川上と川中のハブとして機能している。
G.WORKS （木工家具）	紀州材を家具という形にする 木の性質を読み、木ごとに異なる無垢のきめの美しさを見極め、年輪に斜めに切り出す「追い柵」など、切り出し方を工夫してデザインに生かすことで、1点ものの家具に仕上げ、暮らしへ届ける。2025年ウッドデザイン賞「紀州スギのロッキングチェア」。
tanabe en+（自由見 学）	人・文化・経済をつなぐ地域拠点 紀伊田辺駅前に立地。構造材や内外装に紀州材を使用。2021年ウッドデザイン賞（ソーシャルデザイン部門）受賞。
懇親会	主要見学先の関係者も交えた交流の場

■2日目（9月18日）

訪問先	気づきと学び
Re-barrack （家具店）/ソマノベース（林業ベンチャー）/協会会員 トークセッション	◎Re-barrack 見学・トーク 受け継いだ地域を、次世代へつなぐ——受け継いだ地域資源の価値、地域の中で循環させる 地域の素材を生かしたものづくりに加え、子どもたちの職人体験や製材所見学、地元高校生との商品開発など、地域とともに素材の価値を考える取り組みを見学。節やあかね材の虫食い痕など、これまで価値がつきにくかった素材にも別の視点を与え、家具やプロダクトとして形にしていた。 また、地域の子どもたちに木や素材に触れてもらい、そこから山への関心を育てる取り組みも進めていた。一方で榎本氏からは、現在は地域内での循環が中心で、首都圏など大きな市場の企業や生活者にどう使ってもらうかが今後の課題、との説明があった。
	◎ソマノベーストーク 「土砂災害による人工的被害ゼロ」をミッションに、人と森との関わりを育てる 人と森との新たな接点をつくる取り組みを紹介。2022年に始めた取り組みでは、地域の樹種を生かした苗木を、都市やオフィスにいる人が約2年間育てる。山へ行かなくても参加でき、育てる過程を写真に撮って記録・発信することで、苗木への愛着を育み、やがて「この木が育つ山を見てみたい」という関心へとつなげていく。苗木を山へ戻す際には、「楽しかったです」「我が子をよろしく願います」といった手紙が添えられることもあり、実際に自分の木を見に和歌山を訪れる人もいるという。地域になじむ木を育てる体験を入口に、都市に暮らす人と森との関わりをつくる、新たな仕組みが示された。

	◎3 者クロストーク・会員との質疑 地域の素材を、異なる視点から新たな価値へ Re-barrack とソマノベースの取り組みを踏まえ、地域材や森林の課題を、教育・デザイン・ものづくりなど異なる視点から捉え直す可能性について意見を交わした。節や傷のある材、間伐材など、従来は価値がつきにくかった素材も、見方を変えることで新たな価値を生み出せることを確認。地域の植生や文化に合った素材を生かしながら、森を育て、材を使い、次の世代へつなぐ循環を、地域内から地域外へ広げていく視点が共有された。
山長商店 (製材加工業の老舗)	100 年の森から、製材・乾燥・加工、そして建築へ 100 年生の大径木が育つ豊かな森林を訪ね、植林から製材・乾燥・プレカットまでの一貫した流れを見学した。同時に、急峻で複雑な地形に沿って木を切り出す現場から、豊かな森林資源を生かすための技術や労力、山の仕事の厳しさも実感した。 山長商店は、地域の森林・林業関係者と製材、建築など川下の事業者をつなぐ地域リーダー企業として、産地内の調整機能を果たすとともに、設計者や建築関係者など都市部との接点もつくっている。建築側からは、構想段階から木材側と相談し、山の状況を踏まえて木を使うことの重要性が語られた。山と街をつなぎ、森を育てることと木を使うことを循環させる、地域材の可能性を考える機会となった。
田辺市庁舎 (建築・ウッドデザイン賞受賞作品見学)	地域の木が、市民が使う公共建築になる 5 本 1 組の木格子が合併 5 市町村を象徴し、天井ルーバーや造作家具など随所に紀州材を使用。地域材が公共空間のデザインと地域の記憶を結ぶ事例。フリースペースはフロアごとにプロポーザルを実施し、G.WORKS や Re-barrack など、それぞれ異なる設えを採用。2025 年ウッドデザイン賞受賞。

ネットヨタ和歌山 田 辺店 (店舗・ウッドデザイン 賞受賞作品)	異なる業種を入口に、木と地域との関係をつくる 木材を紀州材に絞り、施工も地元業者と連携。店舗づくりでは東京おもちゃ美術館に監修を依頼し、設計段階からウェルビーイングの視点を取り入れ、取り組みそのものを空間に組み込んだ。地元の子どもたちと木の壁面を制作するなど、立ち寄りたくなる店舗づくりとともに、木や地域への関心を育てる場を形にした。龍神村での森林保全にも取り組み、企業活動と森との接点を広げた。2021 年受賞。
南紀白浜空港 中村工務店/山長商店/竹 中工務店/協会会員 トークセッション	「どこの山の木なのか」——紀州材が建築になるまで 東京の「FLATS WOODS 木場」などの事例を手がかりに、紀州材が建築になるまでの流れと、地域材を都市で使う意味について意見交換。竹中工務店からは、産地が分からない木材に物語を持たせる必要性を、山長商店との出会いも交えて紹介。山長商店からは、山や工場を見たうえで構想段階から相談してほしい、材は急には用意できず半年前から準備すれば実現できる、と説明。中村工務店からは、紀州材を使う理由として強度はもちろん、木目の美しさが紀州材の大きな特徴であること、県内の公共建築物や県外の宿泊施設などで木目をあらわしで使っている事例を紹介。施工者の立場から、大工の担い手不足と、専門学校と連携した育成の取り組みにも触れた。地域材を選ぶ理由を、性能だけでなく素材の美しさや背景まで含めて考える場となった。

【Re-barrack トークセッション】

「森への入り口と、木が活きる『出口』～人を動かすソマノベースの共創モデルと、熊野のスピリットが宿る空間デザイン～」(開催：Re-barrack)

Re-barrack トーク：榎本 将明氏（有限会社榎本家具店 代表取締役）

ソマノベーストーク：浅利 知波瑠氏（株式会社ソマノベース CFO／プランナー）

ファシリテーター：末広 耕也（一般社団法人日本ウッドデザイン協会 専務理事）



【南紀白浜空港 トークセッション】

「見学のその先へ。紀州材が『建築』になるまでの物語。」

松崎 裕之氏（株式会社竹中工務店 木造・木質建築推進本部 専門役）

中村 晃大氏（株式会社中村工務店 副社長）

迫平 隆志氏（株式会社山長商店 取締役）

ファシリテーター：末広 耕也（一般社団法人日本ウッドデザイン協会 専務理事）



視察先の様子

【紀州高田果園】



ウッドデザイン賞受賞のビニールハウス



工場の焼杉は社員自らが作業

【秋津野ガルテン】



旧校舎を利用



懐かしさが感じられる教室での昼食

【龍神村森林組合・龍神木材共販所】



競りが開催された後の現地を視察

【G.WORKS】



紀州材の特徴を生かした家具づくり



※参考 追い杢利用の新作

【tanabe en+】（自由見学）



【Re-barrack】



Re-barrack にてトークセッションを開催



あかね材を活用したプロダクトを販売

【山長商店】



山長商店 100 年の森の視察



林業の現場にて架線集材の説明を受ける



製材から乾燥・加工までの現場を視察

【田辺市庁舎】



合併された 5 つの自治体を象徴するように各地域産材を使用したデザイン。フリースペースはフロアごとに設えが異なり、写真の家具は G.WORKS によるもの。

【ネットヨタ和歌山 田辺店】



木質化された店内。各所に地域産材を使用している。

【南紀白浜空港（トークセッション）】



紀州材が建築になるまでの流れや、地域材を都市で使う意味について、設計・施工・製材それぞれの立場から意見を交わした